



**Data**

監督・脚本：ギオルギ・オヴァシュ  
 ヴィリ

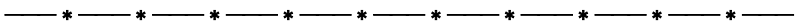
出演：イリアス・サルマン／マリア  
 ム・プトゥリシュヴィリ／イ  
 ラクリ・サムシア／タマル・  
 レヴェント

## 👁️👁️ みどころ

『みかんの丘』（13年）に続いてグルジア（ジョージア）の映画を鑑賞。まず、セリフが全くないまま進む、老人と孫娘による小さな中洲でのとうもろこし栽培の姿にビックリ。しかし、ある日1人の傷ついた兵士を助けたことから1つのドラマが・・・。

他方、近時の日本と同じように、コーカサスの国にも想定外の大雨が降ると、とうもろこしの収穫は？春から秋への「期間限定」で形成された小さな中洲は？

さて、あなたはこの寓話から何を学ぶ？



### ■大阪の中之島も中洲だが、本作の中洲は？■

『みかんの丘』（13年）に続いて、「コーカサスの国グルジア（ジョージア）で起きた紛争を背景に戦いが広がる今日、人間として在るべき姿を示した傑作。人間と戦争の真実を描いた感動の2作品を一挙公開！」とチラシに記された本作を鑑賞。

私の職場のすぐ近くには大川が流れており、中之島があるが、中之島はその名前のとおり大川の中にできた中洲。それと同じように、1992年以降激しい戦争状態にあったジョージアとジョージアからの独立を主張するアブハジアの間にはエングリ川が流れているが、この川は春の雪解けとともにコーカサス山脈から肥沃な土を運び中洲をつくるらしい。もっともその規模は大阪の中之島とは大違いのちっぽけなものだが、そこではとうもろこしの栽培ができるそうだからビックリ。

## ■□■冒頭から全くセリフなし！それがいつまで・・・■□■

本作の主人公は『みかんの丘』と同じように、冒頭からアップで登場する老人（イリアス・サルマン）。『みかんの丘』では最初からセリフが飛び交っていたが、本作の導入はこのアブハズ人の老人が昔からの風習のとおり、小舟に乗って中洲に渡り小屋を建て、土を耕し、とうもろこしの種を蒔いて苗を育てるシーンが延々と続いていくだけで、セリフは全くない。本作のポイントは、この中洲の西岸ではジョージアとアブハジアが敵同士で睨み合っているため、時々銃弾音が鳴ることだ。

それだけでは退屈で耐えられないところだが、そこはよくしたもので、何度目かに行き来する小舟には孫娘（マリム・ブトゥリシュヴィリ）が登場し、こちらもセリフは全くないものの黙々と祖父のお手伝いをするので、本作前半はそんな2人の生活ぶりと働きぶりに注目！

## ■□■両岸で敵対する兵士たちの動向は？■□■

中洲のすぐ側を通る警備艇に乗った兵士たちは時々老人と少女の姿を見かけるが、さすがに彼らもこの老人と少女を敵とは思わないようだ。ところが、ある日老人がとうもろこし畑の中に傷を負ったジョージア兵（イラクリ・サムシア）を発見し、その治療をしようとしたところから話がややこしくなってくる。1つはこの男が意外にいい男だったため、年頃の（？）少女がこの兵士に興味を示し、いかにも少女っぽい仕掛け（？）を放つこと。これには老人はおかむりだが、春の目覚めはどうしようもなし・・・？その他、少女の排泄行為や夜中に川の中に素っ裸で入って水浴びをするシーンなど、極限の戦争状態の中にも人間の営みが・・・。

もう1つはこのジョージア兵の探索をめぐってジョージアとアルハジア両軍の動きが活発になること。ジョージア兵は一人だけでそれに太刀打ちすることはできないから、さてどうするの？そう思っていると・・・。

## ■□■この集中豪雨は想定外！？■□■

本作を観て何よりも驚いたのは、こんな中洲でも春から秋にかけてホントにとうもろこしの栽培と収穫ができること。例年通り順調に収穫を終えて、例年通りに中洲から撤退。それが老人の目論みだったが、本作のクライマックスでは異例の大雨のため（？）予定より早く中洲が失われそうになるから、さあ大変！小屋の中に雨が入り込むくらいは想定内だが、近年の日本のような集中豪雨は想定外だ。

日本は広島や熊本、和歌山等が集中豪雨による土砂崩れに襲われたが、本作では中洲そのものがなくなってしまうから大変だ。収穫をしたとうもろこしを小舟の中に積めるだけ積んで脱出。それしか方法がないが、それまで働きに働いていた老人はそんな最後の重労働

働の中で倒れてしまうことに……。中洲が形成されている冒頭のシーンも興味深い、集中豪雨の中で中洲が侵襲され、小屋も倒され、中洲そのものが消滅していくシーンは興味深い。それは『十戒』（56年）や『エクソダス：神と王』（14年）（『シネマルーム35』301頁参照）で観た海が割れるシーンほどの迫力はないが、自然の猛威を知るには充分だ。

## ■□■中洲での営みは承継されるの・・・？■□■

本作はこのクライマックスにてジ・エンド……。そう思ったが、ラストにはもっと興味深いシーンが登場するのでそれに注目。最初に書いたとおり、エングリ川のこの付近に中洲ができるのは自然の営みだから毎年のこと。したがって、スクリーン上で観たように家も老人もそして中洲そのものがあの大雨で流されてしまったが、また翌年になれば少しずつ中洲ができてくるはずだ。しかして今、既に少しだけできている中洲に小舟に乗ってやってきた男は一体誰？そして、小さい中洲に上陸（？）した彼が土を掘っているのは一体なぜ？そこで掘り当てたものは一体何？

本作では少女はいつも身一つで老人と共に中洲にやってくるが、いつも大切にしていたのは可愛い1つの人形。この人形もあの大雨の中で流されてしまったはずだが、さて……。

去る9月6日に観たアニメ映画の『レッドタートル ある島の物語』（16年）（『シネマルーム38』未掲載）はスクリーン上に何度も登場する赤いウミガメをモチーフにした寓話的な物語だったが、本作もそれと同じように老人と少女を主人公として展開される1つの寓話だ。少女は翌年に学校を卒業する予定だったが、無事卒業できたのだろうか？また、老人に命を助けてもらったあのイケメンのジョージア兵士は、なぜ翌年一人で中洲を訪れたのだろうか？ひょっとして、今年は彼がとうもろこしを栽培することに……？

2016（平成28）年10月25日記